

マルクス・レーニン主義哲学とチュチュエ（主体）思想

井 上 周 八

- 一 はじめに
- 二 マルクス・レーニン主義哲学とチュチュエ思想
- 三 チュチュエ思想について
 - (一) 全社会のチュチュエ思想化
 - (二) チュチュエ思想の哲学的原理
 - (三) チュチュエ思想の創始と完成
 - (四) チュチュエ思想の人間観とその歴史的意義
- 四 おわりに

一 はじめに

レーニンによれば、マルクス主義は三つの構成体系を持っている。一つは哲学（弁証法的唯物論とその歴史への適用である史的唯物論Ⅱ唯物史観）であり、一つは科学的社会主義であり、残りの一つは科学的経済理論であって、こ

れら三つの構成内容が有機的に結合されて一つのまとまった全体をなしており、マルクス主義とよばれてきた。

このマルクス主義の三つの源泉として指摘されるのがドイツの古典哲学とフランスの空想的社会主義とイギリスの古典派経済学であった。マルクスとエンゲルスはこれら三つの源泉を批判的に継承して一八四〇年の前半から新世界観を確立し、当時のプロレタリアート解放の革命理論を打ち出した。

マルクスの死後、レーニンは独占資本主義（帝国主義）の時代にマルクス主義を創造的に発展させて、ロシアに世界で最初の社会主義国を誕生させ、このためマルクス主義はマルクス・レーニン主義とよばれることになった。その後スターリンがあらわれ、毛沢東が登場し、それぞれスターリン主義、毛沢東主義とよばれる革命理論を提示したが、これらはいずれもマルクス主義を基本的に継承しながら、時代の変化と各国の置かれている特殊具体的条件のもとでマルクス主義を創造的に発展させた革命学説である。しかし、社会主義、共産主義をめざす革命理論としては、通常マルクス・レーニン主義があげられる。

勿論、搾取と抑圧の一掃された新世界を創造するためのマルクス・レーニン主義は、これに反対する陣営からは一顧の価値も認められないのみならず邪悪な思想・理論として排撃されており、さらには労働運動関係者の一部からも時代遅れの無用の学説であるとの批判を浴びせられている。

またスターリン主義に対しては、新左翼の一部から官僚主義として強い拒絶反応がみられ、さらに東欧社会主義諸国に対するソ連の政策が、これら諸国の自主的発展を阻害する側面をもつものとしての批判や、ソ連の修正主義的傾向に対する危惧も根強い⁽¹⁾。

(1) つい最近（一九八二年十月二十日）では、在日朝鮮人の機関紙「朝鮮時報」は、ソ連のタス通信社代表団、文化省局長の

相次いで南朝鮮入りに関連して、「理解できない奇怪な交際」と題する論評を掲げて次のように述べている。

「最近、ソ連のタス通信社代表団がアジア太平洋通信社機構執行理事会会議に参加するため、南朝鮮入りをしたという。これについてソ連文化省の局長が世界博物館協議会アジア地域会議に参加するという名目で南朝鮮入りをしたという。はなはだしくもタス通信社代表団は、ソウルで全斗煥がいらいとも会見したという。

海外で祖国が統一されるのを一日千秋の思いで願ひ、その実現をめざしてたたかっているわれわれ在日朝鮮人は、これに対して実に驚きを禁じえない。

いかに国際会議とはいへ、社会主義国であり、わが共和国の友邦である国が反共、反ソと勝共統一を鼓吹する南朝鮮のような、アメリカ帝国主義の植民地に公式代表団を送り込んだというのは、誠に奇怪なことといわざるをえない。

それでもわれわれは、これまで彼らが自らの尊厳を重んじ、兄弟国間の義理を守るすべを知るものと考えてきた。

しかし今回、タス通信社代表団とソ連文化局長が南朝鮮入りしたのは、彼らに対するわれわれ在日朝鮮人のこうした好ましい感情に泥水をかけた。

われわれは、アメリカ帝国主義のラッパ吹きとなってソ連と社会主義諸国を悪意をもって中傷し、南朝鮮をわが共和国のみならず、ソ連を攻撃するための軍事基地に委ねている南朝鮮がいらいを訪ねる彼らに何の尊厳があるのか疑いをもたざるをえない。

一体彼らは、社会主義国との「開放外交」という看板のもとに、われわれ兄弟諸国との間にくさびを打ち込もうとするアメリカ帝国主義と南朝鮮がいらいの企みを知らぬとでもいうのであろうか。

われわれはまた、言葉ではわが共和国の統一の努力を支持するといながら、行動では南朝鮮の民族分裂主義者と交際する彼らに何の義理があるのか、問い正さざるをえない。一体、わが共和国を友邦と称している人びとが、いまは反対に友邦の敵を友邦とみなしたとみるのが正しいのだろうか。

それだけでなくともいま、南朝鮮がいらいは今回の事態について、南朝鮮に対するソ連の政策転換だとして、喜びを隠せずにいる。

友邦諸国の感情を害し、共同の敵であるアメリカ帝国主義を喜ばせるようなやり方は誰も穏当とはみないだろう。

とくに今回の事件が七十万在日朝鮮人の中で大きな憤激を買ったのは、タス通信社代表が民族の敵として朝鮮人民から見捨

てられて久しく、世界人民の一致した憎しみと糾弾の的となつている全斗煥逆徒と会うこともためらわなかつた事実である。これは、死滅しつゝある全斗煥を延命させ、はくをつけるのに助力し、自主と民主主義をめざす南朝鮮人民の闘争に冷水を浴びせて「二つの朝鮮」を企む者と相槌を打つ行為にしかならない。

世界の人びとは、彼らが自分の口から全斗煥をアメリカ帝国主義のかいらい、殺人鬼と呼んだ事実を記憶している。自らかいらいと罵倒しながら、殺人鬼と握手する彼らの行動は実に不可解なことだ。

一体なぜ、世人を啞然とさせるこうした奇怪な出来事が起きたのか。単純な悪意でないとすれば、何かを得ようとするねらいなのか。悪意をもつこともよくないが、理性を失うことはさらに悪い。わが国のことわざには石で自分の足をくたくたということばがある。

こうした行為は結局、アメリカ帝国主義者が南朝鮮における植民地軍事基地を強化するうえで助けとなり、極東とアジアの平和を脅かし、彼ら自身にも利益とならない結果をたもたすのは明白だ。みえすいた言行乱雑なことをすることは愚かなことである。

われわれは、彼らがふたたびこうしたことをしてかき、良好に發展するわが国とソ連両国間の關係に陰が射さぬよう願っている。」

これは朝鮮民主主義人民共和国政府の正式な抗議ではなく、在日朝鮮人の意見として発表されたものであり、ここにも反米自主勢力の団結を願う共和国の姿がみられ、またブレジネフ書記長死去に対する共和国の対応が朝ソ友好の念願を示しているが、しかしここで述べられている「朝鮮新報」の見解は部分的ではあるが社会主義ソ連の否定的現象を示していることは見逃せない。

このようにマルクス主義に立脚する社会主義の現状にもいろいろの矛盾が存在しており、それらに対する人々の危惧にも根拠がある。

しかし、もともとマルクス・レーニン主義は単なる教条や公式ではなく、ましてや、現時代の新興諸国や資本主義諸国の困難打解のための万能薬ではなく、それは、社会主義、共産主義建設のための一般的指針であり、各国の置か

れている具体的諸条件と、歴史の新たな段階にもなつて、創造的にその普遍的真理が生かされ、適用されるべきものである。このため、時代の変化発展に伴なう新たな状況の下では、理論そのものが深化され発展させられなければならない、この意味で古いといえば古いが、この意味での古さは何らマルクス・レーニン主義のもつ意義を否定することにはならない。当然のことであるが革命の対象が変われば革命の理論も変わらざるをえないからである。

マルクス・レーニン主義はその性質上、もともと生きた・不断に発展し豊富化しつづける学説であり、古い公式を新しい経験を考慮し、現実の変化につれて豊富化されることを要求する理論である。

ところで一九七〇年代にはいるや、私たちの周辺に金日成（キムイルソン）主義という言葉が聞かれ始め、一部の熱心な信奉者が生まれ、私自身も過去四回の訪朝で北朝鮮の現実を知り、現在、金日成主席が半世紀余りにわたる革命と建設のなかで創始した金日成主義の素晴らしさに打たれて主席の著作を学習しつつある。

「百聞は一見にしかず」というが、まさにこの諺は私の場合にあてはまった。一九七九年三月の第一回訪朝のとき、私はそんな立派な社会主義国は存在する筈はなく、また金日成主席が偉大だといつても、大衆が存在しなければ何も出来る訳はなく、偉大なのは人民大衆である、と考えていた。それ故、偉大な領袖として金日成主席をあまりにも高く評価する態度は、個人崇拜ではないか、という気持もあつて、批判的に北朝鮮を見聞しようという姿勢、俗にいえばアラ探しの気持がないわけではなかった。しかし、三週間という僅かな日数の訪朝ではあつたが、あの貴重な体験は、その私の生き方に強い影響をもたらし、私が生き甲斐をあらためて感ずるようになった結果をもたらした、ということが出来る。

私がなぜ、訪朝以前から、朝鮮の統一を支持し、地域の総連の活動家の皆さんと不十分ではあつたが行動を共に

し、主席の著作や「朝鮮時報」、「朝鮮画報」、「統一評論」その他の文献に接しながら、批判的な気持で訪朝したか、という点、世の中には本質と現象が一致せず、文書にかかれていることと現実が屢々不一致であることがあることを過去の経験で知らされていたからである。

つい先日、小学校時代の同窓会の一泊旅行が箱根湯本で行なわれた。翌朝、目がさめ浴場へゆくと、まだ外は暗い時間なのに同窓のA君が先客であった。それからA君とのやや長い対話が始まった。彼は小学校時代の級長であり、家の事情で学歴を身につけていないが、昔の面影を残している読書家であった。私は朝鮮が素晴らしい国になっている話すると彼は次のように語ってくれた。「ぼくは終戦のとき満州におり、そこからソ連に連れてゆかれ、捕虜生活を五年送ってきた。ぼくはわれわれ捕虜と同様の生活をしている底辺のロシア人と生活をともにし、ソ連では本音と建前でずいぶん違うことを経験してきた。ソ連の共産党の文献や政府の文書には、みんな立派なことが書いてある。しかし現実はそのようなものではなく、ロシア人もまず自分の利益ばかり考えている。当時は戦後であったという理由もあろうが、社会主義といっても結局は人間が変わらなければ駄目だ。

中国のときもそうだったが、文化大革命以後の四人組追放以前、日本の学者・文化人の一部は、中国を滅茶苦茶にほめ上げて、蠅一びきい素晴しい国だとほめ、毛沢東万才で大変だったが、今ではどうか。だから朝鮮の場合でも、すくなくともあと二十年もたつてからでなくては、果してほんとうに良い国か、そうでないのか、という評価は下せない。とくに金日成という今の指導者の死後がどうなるかが一つの決め手だと思う。」

その他のいろんなことを述べたが、ほぼA君は右のような話を私にしてくれた。

A君が世間ばなしをするように淡々と語ってくれたことのなかに、多くの正しいことが含まれており日本人の共通

の考えや意見が含まれているように思われる。たしかに社会主義諸国のあれやこれらの余り良くない話がマスコミを通じて耳にはいる。具体的なことは避けるが、たしかに社会主義国にも良くない現象があることは前述のようにあらためて指摘するまでもない事実である。そうしたこともあり、朝鮮を訪問するに際して批判的に、慎重にならうとする姿勢になったのは私にとつては当然のことであった、といつてよい。

しかし、私の批判的立場は、一週間もたたないうちに崩れてしまった。私の感性を通して知り得た共和国の実態がその原因である。

清潔な街。子供たちの明るさ。浮浪者も乞食もない国。労働党を信頼している国民。

また、対外文化連絡協会をはじめとする共和国の人たちの私たち日本人への対応の誠実さ、真面目さに打たれた。政治とは対人活動であるということの実践がなされていたのであり、金日成主席のチュチュ思想を学び、日朝友好運動に努力している同志として心からの親愛の情で迎えてくれたのである。

次に主席が偉大なのではなく勤労人民大衆がえらいのだ、という点については、主席ほど人民大衆のために献身的に働き、それ故朝鮮人民から敬愛されている指導者は存在せず、指導者と人民大衆は、朝鮮民主主義人民共和国においては、まさに一つであるという事実を知ることができた。もともと社会主義、共産主義は人民の幸福のための主義である。

「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という集団主義の原則が朝鮮社会主義憲法の第四九条に掲げられている。東北の詩人宮沢賢治は「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」とのべているが、あらゆる宗教の目指すものも神や仏の愛とか慈悲のもとでの人間の幸福であり、これは宗教に托した人間の願望の表

現にほかならない。

地上のあらゆる人間は、草木が空に向ってのびるように幸福を求める。そして人類の歴史は人類がより幸福に生きようとす歴史であったし、勤労人民の幸福を妨げるあらゆる束縛と搾取に対する闘争の歴史であった。そして現代は、世界の各国が自主を求め、搾取と抑圧のない新社会を実現しようとして立上りつつある時代である。そうした意味で私たちは真の社会主義、共産主義の実現を求めている。そして私自身は共和国の実態を見聞し、真の社会主義理想が共和国に実現されていることを知り、大きな希望と感動とよろこびを抱いて帰国することができた。そして金日成主席の著書を、訪朝の体験に照して読み直すなかで、主席の創始されたチュチェ思想とキムイルソン主義こそ、単に朝鮮一国の指導思想、指導理論に止まるものでは決してなく、現時代のすべての人間のしあわせを願う人々の指導思想、指導理論であるとの確信を深めることができた。

にも抱らず、結局、私は（勿論私以外の多くの人もそうであるが）共和国の素晴しさに打たれ、主席の革命と建設の理論に心から共鳴せざるを得なかったのである。そうした私の意見に対し、A君は二〇年後になって、もう一度私がどう考えているかを聞くまでは、朝鮮が素晴しいという私の意見には賛成できないと答えたのである。

特にA君は金日成主席以後が問題であるという意見をのべた。このA君の意見は卓見であり、的を射たものだと思

う。
革命と建設は一代では終らず、代を継いで継続されなくてはならない。このためどんなにすぐれた指導者でも一代ですべてを終らせることができず、必ず後継者問題が必然化する。そして世界の社会主義国での後継者問題で、若干の重大な混乱が起きたことも事実である。この点は本稿の直接のテーマでないので、深入りはしないが、共和国では

この問題は徹底的に研究されたと私はみている。そして後継者問題解決の諸原則が確立され、絶対の支持のもとに、全党、全人民によって金正日書記が後継者に決定されている。いわゆる世襲制とは縁もゆかりもない解決であるが、日本では世襲制ではないか、という批判が相当広く流布されている。この全く誤っている「社会主義の世襲制」説はやがて徹底的に否定されなければならないだろう。しかしそのまゝに、私たちはチュチェ思想や金日成主義（キムイルソン主義）そのものについて理解しなくてはならず、さらにマルクス主義の布及している日本ではキムイルソン主義とマルクス・レーニン主義の関係についても正しい認識をもたなくてはならない。

二 マルクス・レーニン主義哲学とチュチェ思想

マルクス・レーニン主義は、プロレタリアート解放のための理論であり、戦略、戦術であり、このマルクス・レーニン主義の哲学が弁証法的唯物論である、といわれている。

では哲学とは何か。哲学とは、これまでマルクス・レーニン主義においては、自然、人間社会および思惟の最も一般的な発展法則に関する科学である、とみられてきた。

戦後いち早く出版された岩崎書店の『哲学小辞典』（一九四七年十月）は、ソ連の哲学の成果を圧縮して一九四〇年に出版された同名辞典の翻訳であるが、その「哲学」という項目では次のように説明されている。

「哲学とは、弁証法的唯物論においては、自然・人間社会および思想の最も一般的な発展法則に関する科学であり、哲学の根本問題は思惟の存在に対する関係に関する問題である。この問題の解決如何によって一切の哲学的諸流派は

二つの陣営、即ち唯物論と観念論とに分かれる。」（一ページ）

この「哲学」という項目ではさらに要旨次のごが記述されている。

すでに古代に哲学は支那とインドに存在しており、ヨーロッパでは西歴前六世紀に古代ギリシャで発生し、そこで発展した。

中世では哲学は神学の一部となり、独立した科学として存在しなかった。

十七世紀から十八世紀にかけてブルジョア哲学（いわゆる新哲学）が開花し、ドイツ古典的観念論（十八世紀末より十九世紀初頭におけるカント、ヘーゲル）の後をうけて、ブルジョア哲学は科学的意義を失った物識り的な真正の反動的な体系に成長し始めた。これに対しマルクスとエンゲルスの創始した弁証法的唯物論がプロレタリアートの哲学とよばれた。

哲学は長い間、個々の科学が未発達のため独自の「科学の科学」たる役割を果たし、哲学のなかに人間知識の一切の部門を包含していたが、一九世紀の中頃に自然科学と社会科学が発展し、哲学から分離した。

弁証法的唯物論はプロレタリアートの哲学として前世紀の中頃に発生し、革命的労働運動の実践と不断に結びついて発展した。この哲学を仕上げるに当って、マルクスとエンゲルスは人間思想の一切の価値ある成果に立脚した。

さて右の説明のなかには科学という言葉が登場しており、それは二つの分野、自然を対象とした自然科学と社会を対象と社会科学の二分野に大きく分類されていることが指摘されている。

では自然科学が自然を対象としており、社会科学が社会を対象としているのに対し、哲学は何を対象とする科学であらうか。

哲学は「科学の科学」とか「全体の科学」などといわれているように、自然だけでなく、社会だけでなく、自然と社会を合せた「全体」を研究対象としており、この意味で「世界」を研究対象としている。つまり、自然と社会の全体である「世界」を研究対象としている。

哲学の対象が「世界」であることからして、哲学を「世界観」ともいう。「世界観」にはしたがって「自然観」と「社会観」が包含されている。

哲学は、こうして全体科学であり、世界観でもある。これにたいして自然科学（これはさらに細分される）と社会科学（これもさらに細分化される）は個別科学である。したがって哲学と個別科学は、全体と部分の関係にある。

哲学は個別科学によって発見された真理、法則の細部まで問題とするのではなく、その発見された真理や法則を普遍化し、一般化して取扱うところの学問である。

自然も社会（マルクスの「第二の自然」も存在である。存在するものには法則がある。自然科学は、自然現象の背後にある法則、自然そのものに内在する法則を明らかにする。

自然科学に対して社会科学は社会現象の背後にある、あるいは社会それ自体に内在する法則を明らかにする。しかし自然には人間の意志が介入しないが、社会現象は人間の意識的行爲をとおしてあらわれる。この点で自然科学と社会科学はことなる（独自性がある）が、しかし自然も社会も存在であり、ここに両者の共通性がある。この共通性がある故に両者の法則を普遍化し、一般化することができる。

こうして哲学は個別科学に立脚し、逆に個別科学は哲学に導かれるという関係を生み出す。つまり哲学は個別科学の総合として成立するが故に、個別科学の指針となりうるのである。

では哲学が、自然、社会および思惟の最も一般的な發展法則に関する科学である、という場合、ここでの思惟の法則とは何であろうか。

人間が自然および社会の法則を把握するということは、その法則が人間の意識、思惟として受けとめられるということである。つまり人間によって認識されるということである。したがって、自然および社会の法則の認識された総体としての思惟は、自然および社会の法則が思惟において把握されたのであるから、この思惟自体が發展法則をもつことになり、哲学内容はその内容としてこの思惟の一般的發展法則を含むことになるのである。⁽²⁾

(2) ここで「思惟」といわれるのは何であろうか。人間は思惟する動物であり、考える動物であるといわれる。人間の基本的性格のなかに「思惟する」ことがあるのは否定し得ない。「思惟」を「意識」と置きかえてもよい。

思惟とは、高度に發達した物質である人間の脳髓の働き、機能である。人間の言語の發展につれて、客観世界の本質を、概念、範疇、表象によって把握する。このような思惟は脳髓の活動であり、所産である。

人間の脳髓が客観世界を対象として思惟するのであるが、観念論は、客観世界を離れて、神、絶対精神などを実在と認める錯倒をおかしている。

人間の思惟は、したがって基本的には実在する世界（社会と自然）についての思惟であるが、言語の發展につれて思惟活動も發展し、実在する世界を離れて抽象的世界についての思惟を生み出す。抽象的思惟の母胎は具体的思惟である。

動物も思惟する能力もたない訳ではない。パブロフは、高等動物、とくに犬は、分析的及び綜合的能力、すなわち個々の刺激を区別したり結合する能力を具えていることを指摘している。エンゲルスは、われわれは「判断活動のすべての形態——帰納、演繹、したがってまた抽象、未知な対象の分析、綜合、両者の統一としての経験——において動物と共通している。その型においてこれらの方法はすべての人間にあっても高等動物にあっても完全に同じである。ただその程度だけが両者において差異があるにすぎない」とのべているが、たんなる程度の差ではなく、本質的差異をもっとみるのが正しいであろう。それは高等動物の本能的、受動的な生き方なまで思惟するのに対し、人間は能動的、創造的な生き方なまで思惟するという差異

である。

人間の思惟と動物の思惟との差異は、人間のより完成された生物学的組織によって生まれるばかりでなく、人間の自主的・創造的・意識的活動によって生み出されるものである。エンゲルスは著書『猿の人間への転化の道程における労働の役割』において、人間の思惟および言語の發展の根本的前提をなすものが労働であると指摘していた。労働が人間自体を創造したのであり、人間の思惟心理活動をも創造したというのである。しかし、単に労働というよりは、人間の創造行為というべきであろう。勿論、労働は人間の創造的活動の重要な部分ではあるが、そのすべてではないからである。理論的思惟、科學の發展は、人間の自然改造、社会改造、および人間改造(教育)という創造的・意識的活動の成果だからである。

要するに個別科學は、世界の一定範圍をその研究対象としており、例えば天文学は天体を研究し、地質学は地殻を、植物学は植物界を、動物学は動物界をそれぞれの研究対象としており、また社会科学は、政治学、経済学、歴史学、法律学など社会の各分野、各側面を研究対象としているが、しかし、これらの個別科學は、いずれも世界を全体として把握することは出来ず、それ故、世界觀を与えることは出来ないであつて、なぜなら世界觀とは、世界のあれこれに関する知識ではなく、全体としての世界に関する認識であり知識だからであり、全体としての世界に関する認識は、哲学(世界觀)のみがこれを与えることができるのであり哲学は全体としての世界の科學的認識を与え、自然、社会の一般的發展法則を明らかにすると同時に、人間の認識が思惟活動であることからして、思惟の一般的發展法則をも明らかにすることができるのである。

しかし、以上のようなマルクス主義の通説的解釈、つまり「哲学とは自然、社会、思惟の一般法則を明らかにする科學である」というだけですみますことができるであろうか。マルクス自身が自己の哲学をそのようなものとしては考へていなかったことは明らかである。

哲学とか世界観が、人生観であり、人間、如何に生きるべきか、という生き方との関係で問題にされ、その意味で科学よりは宗教に近い学問であるとみられているのは何故であろうか。それは、哲学が単に科学的認識の問題に局限されてはいないからである。哲学は科学であると同時に如何に生きるべきかに解答を与えるものである。つまり世界観であると同時に人生観でなければならないのである。

何故か。哲学は、人間が哲学する学問である。自然科学や社会科学では、人間が世界の法則を探求するのであるが、それ自体は、人間如何に生くべきかに解答を与える学問ではない。他方、宗教は如何に生くべきかに解答を与えてはいるが、それ自体は何らの科学にも依拠していない。こうして科学は真理、法則を与えるが、生き方は教えてくれず、宗教は生き方（信仰）を与えてはくれるが科学に依拠していないのであって、この矛盾を解決すべき使命を担う科学が実に哲学にほかならない。⁽³⁾

(3) マルクス主義は宗教をどのようにみるのか。マルクス自身は、マルクスの伝記や全集をみればわかるように、ヘーゲルを克服し、フォイエルバッハとともにキリスト教を克服して、さらにフォイエルバッハをのりこえて天上の批判（宗教や観念的哲学の克服）から地上の批判（法律、政治の批判から、さらに経済学の研究）に移り、地上に神の国を実現するためにマルクス主義とよばれる革命理論を創始したのである。

マルクスは「ヘーゲル法哲学批判」（一八四四年）で、「人間が宗教をつくるのであって、宗教が人間をつくるのではない」⁽⁴⁾マルクス・エンゲルス選集』補巻四、一七三ページ）とのべ、「宗教は、自分自身をまだかちえていないか、または、それをふたたびうしなってしまった人間の、自己意識であり、自己感情である」（同上）、「宗教は人間の本体を空想的に実現したものである。というのは、人間の本体が真の現実性をもっていないからだ」（同上、一七四ページ）とのべている。そして、「民衆の幻想的幸福としての宗教を揚棄することは、その現実的幸福を要求することである。民衆は自分自身の状態にかんする幻想を揚棄せよと要求することは、幻想を必要とする状態を揚棄せよと要求することである。だから、宗教の批判は潜在的

に、宗教を後、光とする苦界の批判である」(同上)とのべている。

つまり、人間がこの現実世界で非人間的であることを強制され、人間らしく生きることができない状態にあるとき、人間は宗教とか天国とかの領域のなかで、人間的な生き方、理想の世界、神の王国を夢想するというのである。人間が、神は愛なり、仏は慈悲なり、というとき、人間が地上で実現できない愛と慈悲の世界を宗教の世界で観念的に実現しているのである。だから、この現実の世界で人間の宗教心に示された理想を実現できたときは、人間は神は愛なりという必要もなく、天上の王国とか来世を夢想する必要もないといえる。もともと人間には老、病、死という必然的な運命がある以上、人間の宗教心は消滅しないであろうが、老、病、死にたいする新しい将来社会の人間的配慮は、宗教の内容を大きく変質させるものと考えられる。

しかし、宗教それ自体はその理想を地上に実現したであろうか。もし宗教にそれを実現する力があるなら、すでにキリストが生まれて二千年近く、釈迦が生まれて二千数百年がたっているのに、その理想が実現されないのはなぜであろうか。

他方、科学とは何であろうか。科学とは人間の頭脳に反映した客観世界の法則の体系である。それは、人間がどう考え、希望しようとも、太陽を西から昇らせ、川の水を上流へ逆流させることができないような、必然性をもった法則の集大成である。

アインシュタインが「なぜ私は社会主義を支持するか」(一九四九年)という短文で、「科学は、目的を創り出すことはできません。ましてその目的を、人間に注入することはできないのです。ただか科学は、ある目的を達成するための手段を供給することができるだけです」(『晩年に想う』、中村・南部・市井訳、講談社文庫、一四八ページ)とのべているように、科学それ自体は善悪の判断をせず、科学それ自体には目的がない。けれどもアインシュタインがつづけて、「目的そのものは、高邁な倫理的理想をもつ人々によって考え出されます。そしてその目的が死産に終らず、生き生きとして活気に溢れていれば、半ば無意識的に社会の漸次的進化を決定してゆく多くの人間たちによって採用され、また押し進められてゆくのです」(同上)とのべているように、科学に目的を与えるのは人間である。

こうして宗教は人の真の願望、理想を高く掲げ、科学は客観世界の法則を解明する。しかし、宗教それ自体は、その理想を実現する力をもたず、また科学それ自体には、目的がない。そこで、宗教はその理想を実現するための媒介として科学の力を借りなければならず、科学はまた宗教によって———ということは実は人間によってということのだが———真の目標を与えられなければならない。宗教の理想つまり人間の理想を地上に実現することこそ、科学に人類がその任務として与えるべきもの

である。この意味で宗教の目的とマルクス主義の目的は一致している。

こうして哲学、世界観は客観世界としての自然および社会のもつ法則の解明と、この解明の体系化された思惟であるだけでなく、思惟する人間が如何に生き、何如に死すべきかという人間の生き方をも内包する科学なのである。

世界観とは何であるかについて、金正日書記は、かつて次のように明確に、革命実践の見地から、のべている。

「今までは、世界観とは、周囲世界にたいする見解と表象の体系だと定義していました。古典家たちもこのように見ました。

しかし、われわれは世界観を単純な科学的認識の問題に局限させず、革命実践の見地から正しく定義しなければならぬと思います。すると世界観とは何でしょうか。

一般的に世界観とは人間とそれをとりまいている世界にたいする見解、立場、方法の全一的な体系であります。」ここで「周囲世界の見解と表象の体系」とのべられているのは周囲世界の法則を認識し、その認識を概念化し、さらに概念化された表象の体系として示すということである。周囲世界を認識し、つまり周囲世界への見解を確立し、それを概念化して示し、つまり表象として示し、これら諸表象を体系化することが、いわゆる世界観と従来はみられていた。このことはすでにみたようにマルクス主義による哲学の規定においてもそうであった。但しマルクス自身がそのように哲学を理解していたかについては大いに疑問である。

次に書記のいう「世界にたいする見解」、「世界に対する立場」、「世界に対する方法」とは何であろうか。「世界にたいする見解」には問題はない。正しく理解され認識された世界を前提にし、次にこの世界に對しどのような「立場」をとるか。歴史を推進させる創造的立場をとるか、歴史の古いものにしがみつき、保守的立場をとるか。前者の

立場に立って、チュチェの人間観、哲学原理に基づく世界観、哲学を創始したのが金日成主席にほかならない。

三 チュチェ思想について

(一) 全社会のチュチェ思想化

金日成主席が「わが党の革命思想、党の唯一思想の真髄をなすのは、マルクス・レーニン主義的なチュチェ思想であり、わが党の唯一指導体系は、チュチェの思想体系であります。」(『金日成著作選集』第五卷五二五ページ)と述べているように、朝鮮の革命と建設を貫ぬく基本思想はチュチェ思想である。

一九八〇年十月十日の朝鮮労働党第六回大会の報告で金日成総書記は、「全社会のチュチェ思想化は朝鮮革命の総体的任務」であることを改めて強調し、朝鮮の革命と建設が歴史的な新段階に到達し、党の組織的思想的基礎が磐石のように固められ、不敗の威力をもつ指導力に發展し、共和国人民が革命の偉業を完成する確信にあふれながら、前人未踏の共産主義社会という楽園をめざしての力強く歩みつつあることを全世界に向けて宣言した。

また一九八二年四月十四日の朝鮮労働党中央委員会と最高人民会議の合同会議でも、金日成主席は「全社会をチュチェ思想化するための人民政権の課題」と題して歴史的演説を行ない、全社会のチュチェ思想化を実現し、チュチェの革命偉業の最終的完成のために力強く前進しようと呼びかけている。

卓越した思想家であり理論家である革命の後継者金正日書記は、「金日成主席生誕七〇周年記念チュチェ思想全国セミナー」に送った論文『チュチェ思想について』(一九八二年三月三十一日)の冒頭で次のようにのべている。

マルクス・レーニン主義哲学とチュチェ(主体)思想

「チュチュエ思想は主席の深奥かつ多面的な思想・理論活動の結実であり、チュチュエ思想の創始はその革命業績のうちでもっとも輝かしい地位を占めています。」

主席によって偉大なチュチュエ思想が創始された結果、労働者階級と人民大衆には革命勝利の新しい道が切り開かれ、人民の革命偉業遂行に歴史的な転換がもたらされました。

主席によって切り開かれ導かれてきた朝鮮革命の歴史は、偉大なチュチュエ思想がりっぱに具現され全面的勝利をおさめた栄光の歴史であります。

チュチュエ思想は朝鮮革命のゆるぎない指導思想となり、現時代の偉大な革命の旗じるしとなっています。

今日、われわれには全社会をチュチュエ思想化する偉業を遂行すべき誇らしい任務が課されています。

全社会チュチュエ思想化の偉業は、チュチュエ思想の旗のもとに切り開かれ勝利してきた朝鮮革命を最終的に完成する歴史的偉業であります。

この偉業を完遂するためには、すべての党員と勤労者がチュチュエ思想の真理を深く体得し、徹頭徹尾チュチュエ思想にもとづいて思考し行動しなければなりません。

チュチュエ思想で武装しその旗をかかげて進むとき、いかなる難関と試練をも克服し、革命と建設で勝利を達成できるといえるのは、半世紀を越える革命闘争の歴史を通じて朝鮮人の胸に深く刻まれた信念であります。」

このように朝鮮の革命と建設の歴史はチュチュエ思想の勝利の歴史であり、チュチュエ思想を具現する過程であり、朝鮮革命は全社会をチュチュエ思想化し、共産主義の思想的・物質的要塞を完全に占領することによってはじめて完成するのである。

いかえれば、人民の俸せを実現する社会をつくり（つまり革命を行ない）、その社会を發展させて人民の樂園（つまり共産主義社会）を建設するには、人間が私有財産制度のもとで必然的に身につけたエゴイズム、個人主義を清算して、人間を思想的につくり変えるとともに、すべての人が豊かに暮らせる物質的条件をつくらなければならないのであり、このような革命と建設で勝利するためには何よりも「チュチェ思想で武装し、その旗を掲げて進む」こと以外に途はないのである。

（二） チュチェ思想の哲学的原理

では朝鮮革命の生命であるチュチェ思想とはどのような思想であろうか。

これについては、チュチェ思想の創始者である金日成主席がこれまでの半世紀に及ぶ革命の実践活動のなかで機会あるごとに繰り返し教えておられ、また多くの論文が各国のチュチェ思想研究者によって発表されているが、まず主席がチュチェ思想について説明しているいくつかの重要な叙述から学ぼう。

主席はつぎのようにのべている。

「チュチェ思想は人間がすべてのものの主人でありすべてのことを決定するという哲学的原理にもとづいています。

人間は自主性を有する社会的存在です。人間のすべての行動は思想意識によって規定されます。人間は自主的な思想意識を有しているが故に外部世界に盲目的に順応しないで、世界を自己の意志と要求にあわせて目的意識的に改造していくのです。人間は世界でもっとも發展しており、力のある存在です。自然と社会を改造するのも人間であり、科学と技術を發展させるのも人間です。したがって、人間は世界を支配する主人となり、すべてを決定する要因とな

るのです。

われわれはチュチェ思想のこのような哲学的原理にもとづいて、勤労人民大衆を中心においてすべての革命理論を展開しています。」「オーストラリア記者たちが提起した質問にたいする回答」(一九七四年十一月四日)

ここにチュチェ思想の真髓が見事にのべられているが、同様の説明は主席によって次のようになされている。

「チュチェ思想は、あらゆるものを人間中心に考え、人間のために奉仕させる人間中心の世界観であり、勤労人民大衆の自主性を実現するための革命学説であります。」「(労働党第六回大会報告)、一九八〇年十月)

「チュチェ思想は、勤労人民大衆を中心にすえて展開した革命理論であり、勤労大衆の役割をもとにした革命の戦略と戦術であります。」「(朝鮮労働党創立三〇周年に際して)一九七五年十月)

「チュチェ思想とは一口に言って、革命と建設の主人は人民大衆であり、革命と建設をおし進める力もまた人民大衆にあるという思想であります。言いかえれば、自己の運命の主人は自分自身であり、自己の運命を切り開く力もやはり自分自身にあるという思想であります。こうした思想は、決してわれわれがはじめて発見したものではありません。マルクス・レーニン主義者であれば、だれでもこう考えています。ただわたしは、こうした思想を特別に強調しただけです。……わたしは、祖国の自由と独立をめざしてたたかう過程で、自己の運命は自らの手で切り開かなければならず、また切り開くことができるという確固とした信念をもつようになりました。」「(一九七二年九月十七日、日本『毎日新聞』記者の質問にたいする回答)

すなわち主席が述べているように、人間こそが現在世界における唯一の自主性をもった、最も発達した有力な社会的存在であり、自然に受動的に順応して生きている他の一切の生物とは異なり、外部世界に能動的に働きかけ、それ

を改造変革することのできる創造性と、自己の一切の活動を規制する思想意識をもつところの社会的存在であり、したがって人間こそが世界を支配する主人であり、すべてを決定する要因である。そして、このような最も正しい人間観に立ち、勤労人民大衆を中心にすえて、すべての革命と建設の理論、つまり人間の自主性が完全に確立され創造性が十分に開花発展し、すべての人間がみな等しくしあわせに暮らすことのできる社会を創造するための理論、を展開するのがチュチュエ思想にほかならない。

チュチュエ思想とは、このように徹底的に人間中心の、人間のしあわせのための世界観であり、勤労人民大衆の自主性を実現するための革命理論展開の基本思想であり、革命と建設のチュチュエ（主体）は人民大衆であり、自己の運命のチュチュエも自己自身であり、人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定するという哲学的原理を基礎とする思想である。

このような徹底した人間中心のチュチュエ思想は、歴史上はじめて、人間が自主性と創造性を備え、目的意識的に活動する社会的存在であることを解明し、自然と社会と自己自身の変革者、改造者としての人間の地位と役割を明らかにした哲学である。

ところでチュチュエ思想の哲学的原理として特に有名な、しばしば引用される「人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定する」という命題は、一読したところでは極めて大胆な、非科学的ともみられかねない表現であるが、しかし、この規定こそチュチュエ思想の本質を示す人間観として決定的に重要な意味をもっている。

「人間があらゆるものの主人であり、すべてを決定する」という主席が繰返しのべられているチュチュエ思想の核心をなすこの規定について、しばしば次のような疑問、すなわちいったい人間にはそんな力があるのだろうか、このよ

うな考えはあまりにもごう慢ではないのか、という疑問、が提起されている。

人間は太陽を西から昇らせ東に沈めることができないように、また引力の法則や電気の法則を否定できないように、一切の自然法則を変えられないし、また人間によってその原因が解明できていない病気もあるし、いくら人間が万年長寿を願うとしても、やはり人間の寿命には限界があるのであって、だから人間がすべてを決定したりあらゆるものの主人になることなどは到底できないという反論が一部の人から出されている。ではこの反論にどう答えるべきであろうか。

たしかに自然法則もそして一定の条件下では社会法則も人間は勝手気儘に否定したり、別のものにつくり変えたりすることはできないし、まだ人類が解明できていない問題もすくなくない。

しかしこのことから「人間があらゆるもの主人であり、すべてを決定する」というチュチュエ思想の基本原理は間違っているといえるだろうか。決して間違っていないばかりではなく、この点を理解することができるかどうかは、チュチュエ思想を理解できるかどうかの岐れ途なのである。

世界が物質からなりたっており、物質それ自体の法則によって運動し変化発展しているということは、すでにマルクスやエンゲルスが唯物論として解明した否定することのできない真理である。また人間が労働する動物であることや、人間の本質が社会関係の総和（総体）であるという唯物論的解釈もマルクスによってなされていた。すなわちマルクスはフォイエルバッハに関するテーゼの十一で「人間性は個人に内存する抽象物ではおよそない。その現実性においてそれは社会的諸関係の総体である」とのべていた。

このようなマルクスの解釈はそれ以前の観念論や素朴な唯物論的人間観を批判克服し、人間の本質を唯物弁証法的

観点から把握したものであり、マルクス以前の見解よりも優れたものであった。

しかし、マルクス主義は自然と社会の支配者、改造者としての人間そのものの本質的特性を全面的に解明したものでなかった。

金日成主席は、マルクスの唯物論を前提としながら、さらにそれまでに提起されることもなかった全く新しい問題、すなわち世界と人間の関係問題、世界の主人が誰であり、主界を改造し変革する力がどこにあるのかという根本問題を提起し、人民大衆が自己の運命の主人、歴史の主人として登場した現時代の要求に応えて、自然と社会は人間が支配し、人間によって改造変革されるという人間と世界との関係についての新しい見解を打ち出し、人類がみずからの力によってしあわせな新社会を建設するための思想的基礎を確立したのである。このような人間にたいする解明こそは、実にチュチュ思想の基礎であり核心である。

人間が世界の主人であり、世界は人間によって支配されるということを明らかにしたチュチュ哲学は、しかしながら決して人間が自然法則や社会法則を勝手気儘に改変できるとか、否定できるなどと主張するものではなく、また物質世界自体が人間を中心に構成されているとか、世界のすべての変化発展が人間によってひきおこされるなどと主張するものではない。

この点を金正日書記は次のように解説している。

「人間があらゆるものの主人であるというのは、人間が世界と人間自身の運命の主人であるということを意味し、人間がすべてを決定するというのは、人間が世界を改造し人間自身の運命を切り開くうえで決定的な役割を果たすことを意味します。」(前出『チュチュ思想について』)

私たち人間は、現在、世界に対する関係において全く相反する二つの態度、生き方をとることができる。一つは、人間にとって当面解決不可能な事柄や、未知の領域があることを重視し、人間は自然と社会の主人ではないとして、何か人間以外の力に頼って生きようとする態度であり、もう一つは人間が社会的歴史的発展のなかで獲得したところの世界を認識し変革して、人間のために奉仕させることのできる人間自身もっている能力を信じ、自主的、創造的に生きようとする態度である。

前者は、人間を結局は世界や自己の運命にとって無力な存在であるとみる立場であり、敗北と不幸に屈従する立場であり、自己自身の力に依拠せず、他人の力に頼り、或は人間以外の神とか仏とか、その他の何ものかに頼る他力本願の生き方であり、搾取階級をよろこばせる立場であり、生き方であるが、後者は人間を単なる世界の一部分としてみるのではなく、人間こそが世界と自己の運命の主人であり、人間のみが世界を改造し自己の運命を開拓できる存在だと確信する生き方であり、革命を勝利に導き、人民の幸福を実現する労働者階級を先頭とする勤労人民大衆の立場であって、現時代の最も正しいチュチュエ思想の立場であり、この生き方、立場に立たない限り人間の真のしあわせを実現できないところの立場である。そしてこの後者の立場を直載簡明に表現したのが、「人間のあらゆるものの主人でありすべてを決定する」という偉大なる主席の命題なのである。

(三) チュチュエ思想の創始と完成

では人間中心のチュチュエ思想は、どのような情況下で主席によって創始されたのであろうか。

金正日書記はチュチュエ思想が朝鮮革命の時代的・実践的要求から生まれたことを以下のように述べている。

「主席は、抑圧されざげすまれた人民大衆が自分の運命の主人として登場した新しい時代の要請を深く洞察して、偉大なチュチュエ思想を創始することにより、自主性をめざす人民大衆の闘争を新たな高い段階に発展させ、人類史展の新しい時代、チュチュエ時代を開拓しました。」

労働者階級の革命思想は、歴史と革命発展の機熟した要請を反映して発生します。

主席が革命に身を投じた頃、労働者階級と人民大衆の抑圧と搾取に反対する闘争には新たな転換が生じていました。世界で初めて勝利した社会主義の影響力が強まり、労働者階級の革命闘争と植民地および半植民地諸国人民の解放闘争が急速にもりあがっていました。帝国主義は人民大衆の革命的進出を阻み、直面した深刻な政治的・経済的危機を脱しようと人民にたいする略奪と弾圧を強化しました。多くの国で革命と反革命間の矛盾と対立が激化し、長いあいだ自主権をじゅうりんされてきた人民大衆が階級的・民族的解放をめざす闘争にたち上がりました。そして革命運動が世界的規模で幅広く、多様性をおびて発展する新しい時代が到来しました。

新しい歴史的条件のもとで革命を前進させるためには、各国の労働者階級と人民が主人としての自覚をもち、すべての問題をそれぞれの実情に即して解決していかなければなりません。わが国では歴史発展の特殊性と革命の複雑さ、多難さからこの問題はとくに主要な問題となりました。朝鮮革命は、人民大衆が自主的に、創造的に革命の前途を切り開くことをいっそう緊切に求めました。

チュチュエ思想は朝鮮革命のこうした実践的要求にもとづいて創始されました。」

朝鮮における共産主義運動は、レーニンの十月社会主義革命の影響のもとに一九二〇年代の初期から発展しはじめた。しかし、朝鮮の初期共産主義運動は、正しい指導者を欠き、極めて重大な弱点と制約をもっていたため順調な発

展の道を歩むことができなかった。

主席は当時の状況を次のようにのべている。

「わが国における初期の共産主義運動は、大衆のなかに深く根をおろすことができず、主として上層部の限られた人々を中心におこなわれました。初期の共産主義運動者はそれまでの民族主義運動の失敗から教訓を汲み取ろうとはせず、依然として大衆から離れ、革命とは縁もゆかりもない分派行動にあけくれました。

新しく育った朝鮮の眞の共産主義者は、それまでの民族主義運動と初期の共産主義運動から深刻な教訓をくみとり、新たな革命的 세계観をもって民族主義運動者や、初期の共産主義運動者とはまったく異なる革命の道を選びました。こうして一九二〇年代の後半期にはいるや、新しく育った朝鮮の若い共産主義者は勤労人民大衆のなかにはいる、かれらの力に依拠し、自主的立場にたって民族解放と階級解放をめざす闘争を展開しはじめました。」（「非同盟運動はわれわれの時代の強大な反帝革命勢力である」）

そして主席がなぜチュチェ思想をもつようになったかについて次のようにのべている。

「チュチェ思想をもつようになった原因を説明するためには、わたしの成長過程にぶつかった二つの問題について話さないわけにはいきません。わたしの成長期間、とりわけ、学生時代に目撃し感じたことのうちで、もっとも正しくないと思つた事柄が二つあります。

その一つは、朝鮮の民族解放運動をおこなうという共産主義者や民族主義者たちが、大衆からうきあがり、上層部のものたち同士が幾人かづつ寄り集って空論と争いばかりやっております、実際の革命運動に大衆を奮立たせようとしなかつたことです。……

それでわたしは、あの人たちのようにしよっちゅう向かい合って論争ばかりやり、大衆運動を展開しないのでは、どうして革命を成功させることができようかと考えるようになり、そういう現象を批判的な目で見はじめました。

……

大衆のなかにはいりかれらを目ざめさせて、大衆自身が主人公となって革命闘争をおこなうようにすべきであって、幾人かの上層部の人たちが寄り集まって議論ばかりしていたのでは、問題が解決されるはずがありません。それでわれわれは、チュチェについて、すべての問題を解決する基本は人民大衆自身にあるということについて、強調するようになりました。

つぎにわたしがぶつかったもう一つの問題は、共産主義運動を神秘視するところから生まれたものか、それとも、ヘゲモニー争いから生じたものか、あるいは事大主義からきたものかは知らないが、当時朝鮮の共産主義運動内部に派閥が多かったということです。……

かれらは革命運動はおこなわずに、三人一党五人一派といったふうに各々党派をつくってコミンテルンの承認を得ようと歩きまわりました。かれらは、それぞれ自分たちこそ正統派であり、真のマルクス主義派であるといいました。こういうわけで、朝鮮共産党は一九二八年にコミンテルンから除名され、結局、党は解散されてしまいました。われわれは、これを朝鮮民族の恥だと思いました。……

こうした二つの側面が、わたしの革命思想の発展に大きな衝撃を与えました。このときから、われわれは人民大衆が革命の主人公であり、したがって人民大衆のなかにはいらないといけないということ、だれが承認しようとしまないと、自国の革命を自ら責任をもって自主的に進めてゆくならば、他の国々からおのずと同情され、認められ、援助

をうけることもできるということを強調するようになりました。これが、われわれのチュチュエ思想の出発点であるといえます。」（雄山閣「チュチュエ思想について」）

ここにチュチュエ思想創始の二つの出発点が生き生きと述べられている。

金正日書記も論文『チュチュエ思想について』（前出）チュチュエ思想創始の出発点として主席が指摘した二点、すなわち

第一点は朝鮮における初期共産主義運動、民族解放運動の実態を主席が深く洞察して、当時の運動家が革命にとって一番大切なこと、人民の中に入って人民を教育し、組織化し、革命闘争に団結して立上らせる方向に進むことを放棄し、大衆から遊離し、指導権争いと、議論にばかりふけり、派閥闘争をこととし、運動を分裂させるという致命的な欠陥におちいつているのを見抜き、これらとは異なる正しい路線、すなわち、革命運動の主体は人民大衆であり、人民大衆の中に入って人民を教育し、人民を一つに団結させ組織動員してこそ革命は勝利するという、大衆に依拠してたたかう真の革命の道を明確にしたこと。

第二点は、主席が当時の朝鮮におよぼした事大主義、すなわち、大きい国や発展した国を崇拜する奴隸的屈從思想であり、自国や自己の民族を低くみ、蔑視する民族虚無主義思想である事大主義と、前提や現実を分析せず観念的に古典の命題をうのみにする教条主義の生み出す害毒から深刻な教訓をくみとり、革命は誰かの承認や指図によってではなく、自身の信念によって、自分が責任をもって行ない、革命で提起されるすべての問題を、自主的に、創造的に解決しなければならないという真理を明らかにしたこと。

右の二点が主席によって創始されたチュチュエ思想の出発点であることを指摘している。

そして書記は、主席がこの正しい出発点から一貫して革命実践を展開し、従来の労働者階級の革命理論を朝鮮革命の現実に適用するにとどまらず、新たな革命理論を創始し、革命実践が提起する諸問題を独創的に解決し、やがて、わが時代の革命の指導思想、チュチュエ思想を完成させたのであるとのべている。

ところで、マルクスの思想もそうであったように、チュチュエ思想も初めから完成された思想ではない。それは革命実践のなから生まれ、次第に完成された思想である。

このことを書記はまた次のようにのべている。

「主席は一貫して革命実践にもとづいて思想・理論活動を展開し、革命実践の提起する諸問題に解答を与える過程を通じて革命思想と革命理論を豊かにしました。革命実践にもとづいてこそ既成理論を自国の革命の利益と実情に即して適用し、新たな真理を探究して新しい思想と理論を生みだすことができます。

主席は革命活動の初期にすでにマルクス・レーニン主義に通暁していました。しかしながら、マルクス・レーニン主義を朝鮮革命の実践に適用することに止まらず、確固とした主体的立場に立って、革命理論の新たな領域を切り開き、革命実践が提起する諸問題を独創的に解明しました。

主席は頑固な民族主義者とえせマルクス主義者、事大主義者と教条主義者に反対し、新しい革命の道を開拓する闘争の過程でチュチュエ思想の真理を発見し、ついに一九三〇年六月、^{カリフン}カ倫で開かれた共産主義青年同盟および反帝青年同盟の幹部会議でチュチュエ思想の原理を明らかにし、朝鮮革命の主体的路線を示したのであります。これはチュチュエ思想の創始とチュチュエの革命路線の誕生を告げる歴史的な出来事でした。

主席はまだ二十歳にも満たない若年にして、民族改良主義、左右の日和見主義などさまざまな不純な思想がばっこ

する混乱のなかで、時代の志向と人民の願望、歴史発展の合法則性を見きわめ、チュチェの真理を示し、朝鮮革命の自主的發展の道を開拓しました。

チュチェ思想は朝鮮革命の実践を通じて現時代の革命の指導思想として完成されました。

革命の指導思想はある時点で一挙に完成されて出現するものではありません。それは時代的・歴史的條件にもとづいて、革命闘争の経験を一般化する過程をへて生まれ、長い闘争過程でその真理性が検証され、内容が豊富になり全一的な思想・理論体系に完成されるものです。

金日成主席は各段階の革命闘争と政治、経済、文化、軍事など各分野の活動を勝利に導く過程で豊富でかつ貴い経験を積み、これを一般化してチュチェ思想をたえず深化発展させました。主席が五十有余年、苦難にみちた朝鮮革命の陣頭に立ってその前途を切り開いてきた歴史は、偉大な革命実践をつうじてチュチェ思想を創始し、それを独創的な思想理論体系に完成させてきた歴史であります。」

主席は一九二六年六月五日、生涯を祖国の自由と独立のために捧げた父・金享稷先生（キムヒョク）の逝去に強い思想的衝撃をうけ、父の遠大な志を継いで革命闘争に一身を捧げようとかたく誓い、マルクス・レーニン主義の著作を真剣に読みふけり、共産主義運動を展開することによってのみ祖国の解放と人民の幸福を実現できるという確信に到達した。主席の述べているように、当時、朝鮮の民族主義者も共産主義者も、朝鮮人民の力を信ずることができず、あれこれの国やコミンテルンなどの国際的権威に依存しようとお互に派閥あらしに明け暮れていた。

こうして何一つ光明を見出せなかった当時、主席は最初の共産主義的革命組織である「打倒帝国主義同盟」を一九二六年一月十七日に結成し、画期的なチュチェ思想を創始した。チュチェ思想は革命の主人は人民大衆であり、革

命はあくまでも自国人民の力で、自国の実情に即して、自主的におこなわなければならないという理念を基本としている。主席は一九三〇年六月三〇日、「朝鮮革命の進路」という報告を「共青および反帝青年同盟の幹部会議」でおこない、「朝鮮革命を勝利に導くためには、革命の参謀部であるマルクス・レーニン主義党をもたなければなりません。革命的な党がなければ、正しい路線と戦略・戦術を立て、広範な大衆を日本帝国主義を打倒するたかひに奮い起こすことも、社会主義・共産主義社会を建設することもできません」(『金日成著作集』第一巻、一〇ページ)と述べ、当時の党建設問題と関連する分派分子の誤った事大主義を批判し、「これまでの経験は、革命を勝利に導くためには人民大衆のなかに入って大衆を立ち上げらせ、革命で提起されるすべての問題を他人に依存して解決するのではなく、自分自身が責任をもって、自国の実情に即して自主的に解決しなければならぬことを示しています」(同上六ページ)と徹底した大衆路線と自主性を強調した。そして想像を絶する困難な状況下で武装闘争を展開し、日本帝国主義の植民地支配から朝鮮を解放し、戦後は朝鮮戦争の廃墟のなかから今日の豊強な朝鮮を建設し、この革命と建設の道程でチュチェ思想を完成させたのである。

(四) チュチェ思想の人間観とその歴史的意義

では人間中心の哲学であるチュチェ思想は人間そのものの本質をどのように規定したであろうか。この点について金正日書記は前掲論文『チュチェ思想について』で、人間の本質的特性についての主席の独創的規定についての原理的説明を以下のように行なっている。

自主性・創造性・意識性は社会的および歴史的に形成され発展する人間の社会的属性である。世界で社会的関係を

結んで生活し活動するのはひとり人間だけであり、人間は社会的にのみその存在を維持し、自らの目的を実現する。自主性・創造性・意識性は社会的存在である人間に固有な性格である。

人間は自主的な社会的存在であるが、ここで自主性とは世界と自分の運命の主人として自主的に生き発展しようとする社会的人間の属性であり、この自主性ゆえに、人間は自然の束縛をたちきり、社会のすべての従属に反対し、すべてを自分に奉仕するように変えてゆく。

主席が教えているように社会的存在である人間にとって自主性は生命である。人間にとって自主性が生命であるということは、人間の生命はその肉体的生命ではなく、社会的・政治的生命だということである。人間は肉体的生命とともに社会的・政治的生命をもっている。肉体的生命が生物有機体としての人間の生命であるなら、社会的・政治的生命は社会的存在としての人間の生命である。

次に人間は創造性をもつ存在、創造的な社会的存在である。この人間の創造性は目的意識的に世界を改造し、自分の運命を切り開いていく社会的人間の属性であり、この創造性があるため、人間は古いものを変革し新しいものを創造しながら自然と社会を自己に有益なものに改造して生きる存在となりうるのである。自主性が主に世界の主人としての地位として表現されるとすれば、創造性は主に世界の改造者としての人間の役割として表現される。

第三の人間の社会的属性は意識性である。人間は意識性をもつ存在、意識的な社会的存在である。意識性とは世界と自分自身を把握し、改造するすべての活動を規制する社会的人間の属性をさす。

この人間固有の意識性ゆえに、人間は世界とその運動、発展の合法則性を把握し、自然と社会を自分の要求に即して改造し発展させてゆく。意識性によって社会的存在である人間の自主性・創造性が意識化され、その合目的な認

識活動と実践活動が保障される。

こうして自主性・創造性・意識性によって人間は世界でもっともすぐれた有力な存在となり、宿命的にはなく革命的に、受動的にはなく能動的に世界に対応し、盲目的ではなく目的意識的に世界を改造する。このように自主性・創造性・意識性をもつ社会的存在である人間は要するに世界における唯一の支配者であり改造者となる。

人間は他の一切の生物とは異なり環境や条件にただ順応するのではなく、自らの自主的で創造的で意識的な活動を通じて自分の要求にそわないものにそうように改め、古くて反動的なものも新しく進歩的なものに変えながら自然と社会をたえず改造してゆく。これが世界をいっそう人間に奉仕する世界に改造し、変革していく人間の活動であり闘争である。

このように金正日書記は主席の創始したチュチェ思想における人間の本質的特性を的確に解明している。

では人間が自主性、創造性、意識性をもつ社会的存在であるという場合、この人間のもっている本質的屬性の相互関係をどう理解すべきであろうか。結論的にいえば、この人間の三大屬性は統一されて存在しながら、それぞれ差別性をもっているのである。すなわち人間が自主性をもつということ自体が創造性をもっていることであって、そもそも創造性がなければ、人間は他の動物と変るところは一切なく、したがって自主性ももたない。人間が創造的行為をするということは、自然や社会に目的意識的に働きかけることであり、そのことよってのみ人間は自主性をもつことができるのである。したがって自主性がある創造性がないとか、創造性がある自主性がない、ということはない。さらに意識性についていえば、自主性は自主的意識として、また創造性は創造的意識として、人間が必然的に意識するものであるが故に、自主性、創造性がある意識がない、などということも本来ありえないのであ

る。それ故、人間の本質的三大属性は統一してのみ存在しているのであって、自主性、創造性、意識性の統一性を正しく理解しなければならぬ。

しかし統一性ととも自主性と創造性と意識性のもつ差別性についても明確に認識することが必要である。

主席は革命と建設における自主的立場と創造的立場について次のように教えている。

「革命と建設で主人としての立場を守る問題と、主人としての役割を高める問題は統一されていながらも、互いに異なる側面をもっています。自主的立場がどのようにして主人としての権利を守り、主人としての責任をまっとうするかという問題と関連するとすれば、創造的立場は、自然と社会を改造していくうえでどのような方法で主人である人民大衆の役割を高めていくかという問題と関連すると言えます。自主的立場が、革命と建設においてわれわれが堅持すべき根本的立場であるとすれば、創造的立場は、自然と社会を改造するうえで、われわれが依拠すべき根本的方法であると言えます。」（雄山閣『チュチェ思想について』二二二頁）

主席が述べているように自主的立場と創造的立場は、統一的な関係にあり、相互に密接な関連をもっている。すなわち自主的立場に立たないなら創造的立場に立つことはできない。また創造的立場に立たないなら、自主的立場を堅持することもできないのであって、例えば人が教条主義におちいり、他人の教条をうのみにして創造的立場に立たないなら自主的立場に立つことはできないのである。

このように革命と建設において共産主義者が堅持すべき根本的立場と根本的方法である自主的立場と創造的立場を堅持するときのみはじめて、人民大衆は歴史の主人、歴史の創造者としての役割を果し、無限の革命的熱意と創造的積極性を発揮することができるのである。

このように自主的立場と創造的立場は統一されて作用するのであるが、しかし主席が教えているように、互いに異なる側面、すなわち、革命と建設において私たちが堅持すべき根本的立場と私たちが依拠すべき根本的方法という二つの側面をもつものなのであって、この自主的立場と創造的立場の相違は、自主性と創造性のちがいが立場の問題として展開されたものである。

こうして革命と建設を遂行するためには、唯一の正しい根本的立場である自主的立場に立って勤労人民大衆の力を結集することが、何よりも不可欠の大前提であり、この立場に立ってはじめて人民大衆の無限の創造力が發揮され、自然と社会の改造が人民大衆自身の力によって遂行されるのである。

また意識性についても、これが人間の本質を形成する属性である以上、自主性と創造性という人間の本質を形成する他の属性と統一してのみ存在する。

すなわち、自主性は自主的意識として、創造性は自然と社会を変革する目的意識として意識化される。しかし意識それ自体は自主性でも、創造性でもないのであって、ここに意識性をもつところの自主性と創造性との差別性がある。

こうして人間の三大属性である自主性、創造性、意識性は人間の本質を形成する属性として統一されながら同時にことなる側面をもつのであるが、主席はこの三大属性のなかで、思想意識は人間の価値を決定する重要な属性であり、思想・意識のなかでも自主的意識と創造的意識が極めて重要な役割を果たすものであること教えている。チュチェ思想は革命と建設を、自主性の確立過程としてとらえ、何よりも勤労人民大衆の革命的思想・意識の確立と高揚が人間の活動を規定する根本要因とみる。それゆえ革命闘争と建設事業においては勤労人民大衆の自覚と積極性を高め

ることが何よりも優先されなくてはならないのである。

かつてマルクスとエンゲルスが新世界観を形成するにあたって第一に強調したことは、衣・食・住に対する欲望充足手段の生産、すなわち物質的生活そのものの生産であった。人間は理性とか宗教とか、その他勝手なものによって動物から区別することができるが、しかし人間自身は、かれらが生活資料を生産しはじめるや、自分を動物から区別しはじめた、というのがマルクスの見解であった。しかし動物と異なる人間の創造的活動はただ労働という自然に働きかける側面にとどまらず広く社会改造、自然改造を含んでおり、社会の発展はこのような人間の創造的活動の発展であり、人類の歴史は人間の創造的發展に裏付けられた自主性の確立の歴史であり、したがってまた自主的意識と創造的意識を基本とする社会改造、自然改造、人間改造に関する思想、理論の発展の歴史にほかならない。

自主性、創造性、意識性は、社会的存在である人間の本質的属性ではあるが、それは人間が生まれながらに所有しているものではないという点で物質の本質的属性とは異なる。

主席は「人間は自主的な意識と創造的な能力を所有するときのみ、自主的で創造的な社会的存在となりうる。人間の自主意識と創造的能力はもって生まれたものではない。人間にとってもって生まれた思想や知識などありえない。人間は教育をつうじて自主的な思想、意識や自然および社会に関する知識をもつようになり、世界を認識し変革しうる創造的能力をつちかう」（白峰文庫③、『社会主義教育テーゼ』、六九〇〜七〇ページ）と述べ、社会主義教育の目的は「人間を自主性と創造性をもつ共産主義的な革命人材に育てることである」（同上）と述べている。

過去、人類がまだ労働をはじめとする創造的活動をすることがなく、したがって他の動物と同じであったとき、その当時の動物としての人間には、当然人間のもつ創造的能力はなく、それ故また自主的意識もなかった。人間の自主

性と創造的能力は人間が創造的活動の発展とともに発展した。自主性と創造性と意識性は人類の歴史の初期の段階でも人間が人間である以上、萌芽的にもつていた特性であるが、それは人間が創造的活動を繰り返すことよって次第に発展する特性であり、創造的活動の発展とともに次第に確立してきた社会的性格であって、動物としての人間がその発生の当初から、先天的性格としてもつていたものではなく、この点で他の物質のもつ固有の性質、つまり物質の本質的屬性と同一の性質ではありえない。人間と他の物質の根本的相異は、究極的には人間が創造的活動をする社会的存在であることから生まれたのである。

主席は「人間の自主意識と創造的能力は生まれつきのもではありません」と指摘し、だからそれを「所有しなければならぬ」と述べており、また教育の目的として、「自主性と創造性をもつ共産主義的人間の育成」をあげており、次代を幼いときから革命的に教育するのは、自主性と創造性が生まれながらのものではなく、育てあげるべきものだからであると教えている。

個人においてもそうであるように、人類も、歴史の発展過程のなかで次第に自主性を確立し、創造性を高めたのであって、この歴史の発展は人間の創造的活動の発展を基本的要因としていることはいうまでもない。

このようにもし人間が創造的活動を行わなかったら、今日の人間と人間社会は存在せず、人間の自主性、創造性、意識性もありえないのである。

マルクス・レーニン主義の哲学は、物質と意識、存在と思维の關係については問題にし、觀念論や形而上学批判でマルクス・レーニンは大きな貢献をし、また階級闘争の理論を基礎にプロレタリアート解放の理論を確立したが、人間それ自体の本質を明らかにし、人間と周囲世界との關係を明確に規定するまでにはいたらなかった。主席はあらゆる

るものの主人としての人間の自主的地位と創造的役割を根本原理とするチュチェ思想を創始して現時代の要求に全面的に応えたのである。

四 おわりに

金日成主席は一九八二年四月十五日、朝鮮人民のみならず五大陸から寄せられた熱烈な祝賀のなかでその生誕七〇周年を迎えられた。私も栄ある世紀の祝典に招かれ、直接生誕七〇周年の諸慶事に参加することができたが、主席が何よりも人民を信頼し、人民も心から主席を慕い、主席を中心にして朝鮮人民がかたく統一団結している生き生きとした姿を目にして、ひたすら革命と建設の勝利の途を邁進しつつある共和国の底知れぬ力に私は感動し圧倒される想いであった。

主席はこの生誕七〇周年の祝賀宴でおこなった記念すべき演説で次のようにのべている。

「わたしはこのたび、各国の友人と多くの同志、全人民から真心こもる熱烈な祝賀を受け、たいへん感動しました。革命同志と人民のあたたかい愛情と厚い信頼はわたしに、今後祖国と人民のためにより多くの仕事をする事で同志と人民の愛情と期待に、かならず応えなければならないとの革命的決心をいっそうかためさせてくれます。

わたしにとってもっともうれしいことは、人民の愛情と支持を受けることであり、もっともはりあいのあるのは、人民のために奉仕することであります。わたしの念願は、これからも人民の愛情と支持のなかで生きることであり、わたしの革命的義務は人民のために最後までたたかうことであります。

わたしは、革命の途についたその時から、つねに人民の愛情と支持のなかで生きてきました。わたしが七〇歳になる今日まで、健康な身体で革命活動をつづけてこれたのは、まったく同志と人民がわたしをこよなく愛し守り、誠心誠意たすけてくれたおかげです。

革命闘争が困難に遭遇するたびに、わたしに勇氣と信念を抱かせ、励ましてくれるのも労働者、農民をはじめとする人民であり、革命と建設を正しい道へ正確に導けるようわれわれに智恵を与え方途を教えてくれるのも、まさに人民でありました。革命と建設の各段階で、われわれがうちだした新たな路線と方針をしっかり擁護し、英雄精神と犠牲精神を発揮して、それらを貫徹したのもほかならぬ人民でありました。

まさに人民は、つねにわたしの心からの保護者であり、ありがたい恩人であり、すばらしい先生でありました。

われわれは、困難で長い革命闘争の過程で、つねに人民の積極的な愛情と支持を受け、また人民を信じ人民に依拠してたたかため、あらゆる難関を克服し、革命と建設で輝かしい勝利を達成することができました。人民の愛情と支持を受け、人民の力を信じ、人民に依拠してたたかうとき、いかなるきびしい試練も克服でき、いかに困難なたたかいても勝利できるということは、われわれが革命闘争の実践のなかで発見した革命の真理であります。われわれが、この高貴な革命の真理をたたかいのなかでみずから見出し、それを確固不動の信条としてたたかるところに、どのように困難で複雑な条件のもとでチュチュの革命的旗じるしを最後まで守りぬき、わが革命の勝利の一路へと導いてこれた秘けつがあります。

われわれが革命闘争を開始してから、いつのまにか半世紀を越す長い年月が流れました。この間わが革命は、チュチュ思想の旗じるしのもとに、大きな前進をとげました。

しかし、われわれのたたかいはまだ終っておらず、われわれにはなすべき仕事が多くあります。

われわれは、分断された祖国を統一しなければならず、社会主義の完全な勝利をなしとげ、祖国の地に幸福な共産主義樂園を建設することによって、チュチュエの革命偉業を完成しなければなりません。

チュチュエの革命偉業を最後まで完遂するためには、勝利におごることなくたたかいを継続すべきであり、革命隊列の統一と団結をいっそう強化すべきであります。」

ここで主席がのべられているのがとりもなおさず人間中心の人間に服務するチュチュエの思想である。

チュチュエ思想とは、このように人民大衆を中心にすえて展開した哲学であり、この思想の根底をなすのは、人民大衆の力にたいするかぎりない信頼であり、人民大衆への愛情である。いいかえればチュチュエ思想は人間すなわち人民大衆のしあわせのみを願ひ、人民大衆自身にだけ依拠して、人民大衆の幸福の実現をはかるための思想である。

勤労人民大衆のための革命理論は、勤労人民大衆の自主性を實現するための主席のチュチュエ哲学を思想的基礎として、いまや、民族解放、階級解放、人間解放に関する理論を包括する革命理論に発展し、社会改造、自然改造、人間改造に関する理論を大成した共産主義革命理論として、朝鮮の革命と建設を導き、今や「全社会のチュチュエ思想化」と「全世界の自主化」の旗を高々と掲げているのである。そしてこのような思想であるが故にチュチュエ思想は、現時代の指導思想としての歴史的使命を担っており、人類思想史上の最高峰として評価されているのである。